

## 折々の記 No153 : 桜漫遊録！

(H22/4/8 記)

“家出老人クラブ”とか“立ち枯れ党”と揶揄される「たちあがれ日本」の結成が近いが、現時点では広がりがないようだ。首長新党も噂され、雨後の筍のようにブームになるのだろうか？民主党に失望し、自民党にあき足らず、かと言って新党にも期待し得ない今の日本の閉塞状態から早く脱却しないと、気付いたら日本は、周回遅れ、世界の孤児になってしまっていたということになり兼ねない。小生のみ危惧するに非ずと信じたい。

ここ暫く、政治向きの話が多かったので、少々趣を変えたい。さる6日から7日にかけて、某社のバスツアーに夫婦で参加した。一泊二日約1,200キロの桜を求めての旅である。平日のツアーということ、料金が少々割高ということもあり、リタイアした夫婦や元気な小母さんグループが多い。

今回のツアーの目玉は何と言っても、岐阜県本巣市根尾谷の「淡墨(薄墨)桜」であり、天下の名湯「下呂温泉」である。

以下、今回の「桜漫遊」の紹介である。

### 1 「満開に近い桜と濃いピンクの桃花の蕾」競演の甲斐路！

川越を発し、関越から圏央道を経て中央道、標高1000mの甲府盆地、雪を頂く南アルプスと桜と桃の競演が絶妙であった。SAでは鶯の鳴き声も。

### 2 伝説に彩られ、奇跡の回生の「淡墨桜」！

春の陽気に一気に開花したのか、期待通りの桜であった。その色を3度も変えると言われる淡墨桜も、当日は3分から4分咲きであった。樹齢1500年余、目通り10m近い、日本三大桜の一つである。皇位継承を巡る争いから難を逃れて根尾谷に隠棲した後の26代継体天皇(在位507～531年、謎の多い天皇?)が、この地を去るに当り別れを惜しんで御手植えされたのがこの桜であるとの伝説がある。この桜の起死回生の並々ならぬ関係者の尽力(資料館で詳細説明あり)に唯々感動し、敬意と感謝を覚ゆ。



### 3 水面に映える幻想二重奏！

下呂に、二本の巨木からなる樹齢400年の「苗代桜」別名「暦桜」がライトアップされている。桜は、折りしも満開であり、水面には小さな漣もなく、ライトアップされた桜が、苗代準備中の水田に見事に映しだされ、幻想的な二重奏、雰囲気醸し出していた。



(苗代桜)



(車窓から飛騨川)

### 4 溪谷と桜！

下呂駅から飛騨金山駅まで20分間のお花見列車である。山の中腹に時折見かけるピ

ンクの桜、蒼き清流を弾き返し、受け流す岩場、飛騨路の河岸には列を為す数本の桜あり、集落には今が盛りの大木の桜もある。右を見、車内を左に移動して眺めつつの、童心に返っての花見も一興である。

## 5 郡上八幡



天険の要害に護られし郡上の盆地、その中央に屹立する郡上八幡城、御城をバックにして中腹に立つ“山内一豊とその妻千代の銅像”、その裾野には桜が咲き誇る。うだつのあがる古い街並み、名水100選のその1とも言われる連歌師宗祇の名に由来する宗祇水、町の食堂に陳列される料理のサンプルを生産する工房も見所である。

## 6 桜花爛漫の国宝犬山城！

国宝犬山城も著名な観桜の地である。桜と御城はよく似合う。昨日の陽春に早や満開である。散る桜が時に舞う。天守閣から眺める城下町、桜の多い街であり、桜並木のトンネルの似合う街だ。

幕府の命によって木曾川堤防補修を実施した薩摩義士の碑に秘かなる誇りを 感じたのは薩摩出身なるが故だろう。



## 7 天下の名泉「下呂温泉」！

開湯は、平安初期の10世紀、江戸時代初期の著名な儒学者林羅山（私塾として昌平黌を開塾、後昌平坂学問所となる。）が、有馬、草津と共に「日本三名泉」と名づけた下呂温泉。温泉街の桜もそろそろ満開である。飛騨路「下留

(しもとまり→ゲル)宿」が転じて「ゲロ」になったと言われる。美人湯温泉の由。1，2回では肌ツルツルは無理かと思うものの、そこは女心か？



(了)

追記：関連七言絶句を作詩しました。

<http://homepage2.nifty.com/teruo3/poem/poem.htm>